コメント3

帯谷 知可　京都大学東南アジア地域研究研究所 准教授

私は最近、ソ連解体後のウズベキスタンで、イスラーム・ヴェール着用問題がどのような文脈と意味を持っているのかについて関心を持って研究しています。近年では、社会において「見えるべき服装」としてどんな服装が正しいのかという議論のなかで、たとえば統一制服を作ろうという動きも出てきますし、市場経済がどんどん入ってきて、ファッション産業がたいへん活性化してきている状況があります。

また、ウズベキスタンには伝統的な、たいへん色鮮やかな絹絣があります。これは日本の紬や絣のように、糸の状態で模様に合わせて印を付けて染め分けてから織るかたちのもので、世界的なファッション・ブランドがこれに目を付けたのがひとつのきっかけになり、国内でもたくさんデザイナーが生まれ、伝統工芸を生かしたファッションを提案し始めています。ですから、今日のいずれのお話も少しずつ引っ掛かる部分があって、たいへん参考になりました。ありがとうございました。

■「伝統」を疑うことの重要性
――「いつからか」を常に問うこと

個々のご報告に対してというよりは、全体的に気が付いたことを３点挙げさせていただきます。まず、やはり「伝統的な衣服」とか「伝統的な服装」というときの「伝統」という言葉の使われ方に、私たちはよくよく気を付けなければいけないとあらためて思いました。「伝統」や「伝統的」を使わずにどう表現するかはとても難しいですが、自分たちがそれらの言葉を使うときも気を付けなければいけない。それはいったいいつからの「伝統」なんだろうということを常に問い、疑ってみなければいけないなということが、ますますよくわかってきたように思います。

ちょうど2019年11月の地域研究コンソーシアムの年次集会シンポジウムで、愛知大学国際中国学研究センターの周星先生が報告され、私にとってはたいへん印象的だったのですが、現在の中国で学生さんたちの自主的な運動のようなかたちで「漢装」がたいへん流行していることを知りました。彼らは、いわゆるチャイナ・ドレスやチャイナ・スーツが中国の伝統服なのではないという主張をしているのですね。私たちも一般的にはチャイナ・ドレスやチャイナ・スーツを中国のナショナル・ドレスだと安易に思いこんでしまっていますが、じつはそれは漢族の服装ではなく満州族の服装で、もっとさかのぼればユーラシア大陸の遊牧民的なルーツにも通ずるものだということを、そのご講演を聞いてあらためて認識したわけです。日本の着物についても同様で、たとえば「振袖」に「ふくら雀」を結ぶスタイルの晴れ着はいつからの「伝統」なのかなど、おそらく問い直してみるべき例はたくさんあるだろうと思います。

■ナショナル・ドレスは
いつ誰が着るものか

杉本先生のお話では、ナショナル・ドレスとしてのサリーの歴史と現在という観点がとても興味深く、私のウズベキスタンに関する研究の関心とも重なる部分があると思いました。サリーの場合は、日常着でもあり、ハレの衣装にもなるというところで、ナショナル・ドレスとしての存在感が確固たるものとしてあるのではないでしょうか。現在においても基本的にはそうだとすれば、そのような位置付け、つまり日常着でもあり、ハレの衣装でもありうるナショナル・ドレスは、もしかしたら現代の世界ではあまりないのかもしれないとも思いました。

ウズベキスタンで、民族衣装として特徴的な、「これがウズベク人の民族衣装です」というようなものが現在どこで着用されているかというと、結局のところ民族舞踊団などの舞台衣装になってしまうのではないかと思います。結婚式などでは、民族衣装的なものを現代風に着るよりも、豪華な西洋風のウェディング・ドレスのほうが流行っています。しかもそれが市場経済化の中で発展してきた結婚関連産業と結びついて、花嫁はいくつかのサロンでエステ、ネイル・アート、メイク、ヘアセットなどを済ませ、まるで女優のような派手なメイクと髪型で、華やかなドレスに身を包み、新郎と一緒に世界遺産などへ出

かけてフォト・セッションをやったり、ビデオ撮影をするというのが、最近の流行になっています。

ですから、ウズベキスタンでの民族衣装のあり方というのは、一方で、ヒジャーブ着用に象徴されるようなイスラーム的な装いをやめさせようとする動きがありますが、それでは一般市民がいつ民族衣装を着るのかというと、意外に胸を張って着られる場面は想定しにくいのです。これは日本にとっての着物もそうかもしれません。

着物リサイクルと「着物フリーク」をどう位置付けるか

小形さんへの質問のような形で、もう一点、思いつきではありますが、着物については最近、もしかしたらリサイクルが以前よりも活発になっているのではないでしょうか。「ご家庭に眠っている着物をお譲りください」というような広告を見かけることがよくあります。貴志先生のコメントにありましたように家庭で着物が他のものに作り替えられることもありましたが、それとは別に、誰か別の人に、着物のまま渡って使われていくということもあって、それなりの市場があるのだろうと思います。コスプレの方向に関心を持つ人たちが現象として際立つ一方で、着物フリークと呼ばれるような人たちもひそかにいますね。たとえば紬を着て日常を過ごしましょう、というような運動をしている人たちがいたり、日本の手仕事への関心などから、着物関連のものに熱意を持つ人たちも一定程度いるように思います。そういう人たちは、数的に把握することは難しいのでしょうか。コスプレに行くような人たちに対して、そういう人たちがどのように位置付けられるのかを考えてみるのもおもしろいかなと思いました。

ローカルな要素がナショナルをすり抜けてグローバルな要素と直結する現代

三つ目は、装いをめぐる21世紀的な要素として――それはおそらくグローバルな規模でのいろいろな動きと絡むことが特徴なのだろうと予想しますが――やはりナショナリズムの世紀であった20世紀にはナショナリズムや建国の理念、国家の正統性を支えるシンボルという文脈でナショナル・ドレスが必要だったとすると、現在はまさに杉本先生が最後におっしゃったように、そして森さんが感動なさったように、一方でナショナルなものが相変わらず必要とされ、それが時に排他的な要素と結びつくことがあるかと思うと、ファッションとしてはエスニックなものやローカルなものがナショナルをすり抜けてグローバルなものと直結し連動するという傾向が、広く見られるようになってきているのかなという印象も持ちました。この会で現代の装いを考えるにあたってはそういう視点を意識しながら、貴志先生がコメントされたように政治、経済、文化、技術の諸側面を視野に入れて考えていくことが大事なのだとあらためて認識しました。